CORE Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk

［論説］

不思議な美しい特質を汲みとる：
*Winesburg, Ohio*における"The Book of the Grotesque"と"Hands"

小　島　良　一

I
"The Book of the Grotesque":
"grotesque"の定義と序文としての役割をめぐって

Sherwood Andersonは*Winesburg, Ohio*の冒頭に"The Book of the Grotesque"という序文を配置しているが、ここで言う「グロテスク」は果たして作品全体を統一するキーワードになり得ているのだろうか。換言すれば、この序文の「グロテスク」は後に続く短編全ての主人公を解釈する上での基準になるのだろうか。William L. Phillipsは"With particular reference to *Winesburg* itself…, it indicates that the book was conceived as a unit, knit together, however loosely, by the idea of the first tale,…."と述べ、この序文が作品全体を結びつける役割を果たしていると考えている（Phillips 62）。また、Robert Allen Papinchakは、""The Book of the Grotesque" functions as a preface to the work, clarifying the idea of truth and pointing to an understanding of how the symbol becomes truth."と述べ、全体を統一する機能を果たしていると考えている（Papinchak 20）。一方、Ray Lewis Whiteは"This fable of grotesquerie—its belief that, by living by and for only one truth or one value or one assumption, humans become grotesque—may account adequately for some of the simpler characters in *Winesburg, Ohio*, but it is futile to read and study the stories as directly explicable by reference to this mystical introduction."と述べ、作品全体を統一する機能を果たしているとは断言していない（White 24）。

むしろ不可解なこの章の内容に引きずられて解釈することには慎重な姿勢を示している。これらのコメントの妥当性を検証する前に、まず「グロテスク」本来の定義を確認し、次に"The Book of the Grotesque"で提示されているグロテスクの定義について検討していくことにする。

"grotesque"はイタリア語の"grotto"（洞窟）の派生語であり、古代の人々によって洞窟の壁画に描かれた人間の像が歪んだり一部が誇張されたりして、現代の基準で判断すると醜いことに由来する。グロテスクなものについて、Wolfgang Kayserは芸術や小説に現れた様々な実例を紹介している。彼の分析対象は16世紀以降ヨーロッパに広まったグロテスク模様やアラベスク模様から始まり、《地上の愉楽の園》など奇怪な幻想画で有名なHieronymus Boschや《ネーデルラントの諺》などフランドルの農民を描いたPieter Brueghelによる絵画、さらにE. T. A. HoffmannやEdgar Allan Poeによる文学作品にまで及んでいる。彼はグロテスクな芸術が超自然現象や異常な行動を通じて滑稽（ユーモア）、風刺、神秘、怪奇、恐怖、戦慄、諧謔、幻想などを表現するものであることを明らかにした上で、「グロテスクなものは一つの構造である。...すなわち、グロテスクなものは疎外された世界である。...疎外されたといえるためにはわれわれになじみ深く気がおけないものが突如、奇異で無気味なものとして暴露せねばならぬ。そのとき変貌してしまうのはわれわれの世界である。突発性、不意打ちがグロテスクなものの本質的属性なのである。」と定義する（カイザー 258）。

アメリカ文学にはこの定義に合致する作品が比較的多いように思われるが、Kayserが著書の中で取り上げているPoeによる"The Masque of the Red Death"もその一つである。イタリアの王子Prosperoが赤死病を逃れて客とともに僧院に引きこもり、広間を宮殿のように飾り付ける。集まった人々も奇怪で厭悪の情をもよおしかねないようなけばけばしい凝った衣装を身につけている。そこに赤死病の仮面で顔を覆った死神の象徴と思しき人影

が現れ、彼らを死に誘い一人残らず事切れるという、正にストーリー全体がグロテスクの塊である。集まった人々の衣装についてPoeは"Be sure they were grotesque. There were much *glare* and *glitter* and *piquancy* and *phantasm*. . . ." （イタリック体は筆者）と形容し、作者の「グロテスク」の定義をさりげなく挿入している（Poe 254）。またPoeと同時代の作家Nathaniel Hawthorneには"My Kinsman, Major Molineux"という作品がある。主人公Robinは牧師である父親から自立すべく、植民地の総督を務める叔父のMolineux少佐を訪ねて、現在のBostonと思われるNew Englandにやって来る。しかし到着した日にRobinは頼りにしていた叔父が植民地人の一団にタールを塗られ鳥の羽を付けられた状態で追放される姿を目の当たりにして愕然としてしまう。Robinの叔父Molineux少佐を連れ回して見せ物にする植民地人の一人をHawthorneは、"The single horseman, clad in a military dress, and bearing a drawn sword, rode onward as the leader, and, by his fierce and variegated countenance, appeared like war personified; the red of one cheek was an emblem of fire and sword; the blackness of the other betokened the mourning which attends them."と描いている（Hawthorne 227）。夜の闇と月と松明及び不協和音を奏でる楽器という小道具が、顔を赤と黒に塗り分けた男の異様さをより引き立てている。この作品にはアメリカのゴシック小説に見られる陰鬱とKayserの定義するグロテスクの要素を十分垣間見ることができる。八木敏雄はアメリカでは「いわゆるノヴェルが文学の主流ではなく、どこか異常な、非日常的な、グロテスクな、極端な、現実離れしたことが平気で展開するロマンスが主流である」と述べ、そのような傾向を生み出した要因について、「夢と悪夢が裏腹に共存し、光と闇が強烈に交錯する国こそがアメリカだが、そのような（ある意味ではゴシック的な）精神風土を形成したものが、神の王国の建設を夢見て渡来し、幾多の挫折や幻滅を味わいながらも夢の実現に固執してやまなかったピューリタンた

ちの、したたかな理念と情熱に由来することに疑問の余地はない。」と述べている（八木28）。イギリス本国では少数派だったピューリタンたちが迫害を受けた末にアメリカ大陸に渡り、彼らの思想がアメリカ社会の主流になり、国家の基盤を作った歴史的な経緯があるが、文学の世界ではイギリスにおいて非主流のゴシック小説がアメリカでは主流になり、前述のHawthorneやPoeのみならず、20世紀においてもWilliam FaulknerやTruman Capote、さらに現役の作家であるStephen Kingに代表されるゴシック的でグロテスクな作品を生み出す作家をアメリカは数多く輩出している。しかし、Malcolm Cowleyが"*Winesburg, Ohio* is far from the pessimistic or destructive or morbidly sexual work it was once attacked for being."と述べているように、この作品の場合、PoeやHawthorneの作品に見られるようなゴシック的な憂鬱で不気味なイメージは見られない（Cowley 15）。しかも特にPoeの作品に見られるようなゴシックロマンス特有の現実とは全く乖離した虚構性を*Winesburg, Ohio*は持っていない。Andersonが生まれた1876年が既にピューリタニズムの残滓だけの時代だったことも作品の傾向に影響しているであろうし、また彼が生まれ育った中西部という地理的な要因が彼の作家としての資質を形成する上で大きな役割を果たしたことも無関係ではないと思われる。[1]

それでは冒頭の"The Book of the Grotesque"を細かく見てみよう。この短編の主人公は口髭の白くなった老作家である。毎朝目を覚ましたときに窓の外の木立を見たいと思っていたが、窓が高すぎてそれを見ることができない。そこで彼は大工を呼んで、ベッドを高くする相談をする。大工は南北戦争に従軍した元兵士で、Andersonville収容所に捕虜として収監され、そこで弟を餓死によって亡くしてしまった。しばらく二人はベッドを高くする相談をしていたが、老作家が南北戦争の話に彼を誘導したことから、話題はベッドを高くする話から南北戦争の思い出話に移行する。弟の死を

話題にする度に大工は涙を流す。いつの間にかベッドを高くする話は忘れられ、後に大工が自分流で高くしたせいで、老作家は床につく際に椅子を踏み台にしてベッドによじ登らなければならなくなった。喫煙のせいで心臓は不規則な打ち方をするので老作家は死について考えるが、それを怖いというわけではない。Andersonによると老作家の肉体は老いているが、彼の内部には若々しさが宿っている。彼は妊娠した女性のようだが、宿っているのは赤ん坊ではなく若々しさだという。

ベッドの中で老作家は夢ともつかない夢を見ていたが、眠気で朦朧としながらも半ば意識のある状態の時に様々な人影が行列のように連なって彼の眼前に現れた。

> You see the interest in all this lies in the figures that went before the eyes of the writer. They were all grotesques. All of the men and women the writer had ever known had become grotesques.
>
> The grotesques were not all horrible. Some were amusing, some almost beautiful, and one, a woman all drawn out of shape, hurt the old man by her grotesqueness. When she passed he made a noise like a small dog whimpering. Had you come into the room you might have supposed the old man had unpleasant dreams or perhaps indigestion.
>
> For an hour the procession of grotesques passed before the eyes of the old man, and then, although it was a painful thing to do, he crept out of bed and began to write. Some one of the grotesques had made a deep impression on his mind and he wanted to describe it.
>
> At his desk the writer worked for an hour. In the end he wrote a book which he called "The Book of the Grotesque." It was never published, but I saw it once and it made an indelible impression on my mind. (Anderson 3)[2]

この箇所から *Winesburg, Ohio* がこの老作家が夢の中で見た様々なグロテスクな人々を書き記した作品という体裁を採っていることがわかる。「そのグロテスクな人々は全てが見るも恐ろしいわけではなかった。」という箇所は、恐らくAndersonが伝統的なゴシック小説などに見られる読者の恐怖心を煽り立てるようなグロテスクなものを意識していて、「グロテスク」という単語から想起される「恐怖」や「奇怪」のトーンを薄める意図の表れかもしれない。ここでいう「グロテスク」とは老作家の定義によれば「笑いを誘う」もの、「美しいと言ってもいいほど」のもの、また（かつてほどの）「見る影のない女性」であり、その女性は老作家に痛ましい哀れみの感情を引き起こす。Andersonのグロテスクなものの定義は恐らくこの部分に集約されている。「もし誰かが部屋に入ってきたら、老人が不愉快な夢を見ているか、消化不良でも起こしているのかもしれないと思いかねなかった。」という箇所は、老作家がそれらの「グロテスク」なものに対して恐怖心や嫌悪感を抱かずに、むしろ書く価値のある魅力的なものと見なしていることを示唆している。

次にナレーターは老作家が考える"truth"と"thoughts"と"grotesque"の関係を提示する。

That in the beginning when the world was young there were a great many thoughts but no such thing as a truth. Man made the truths himself and each truth was a composite of a great many vague thoughts. All about in the world were the truths and they were all beautiful.

The old man had listed hundreds of the truths in his book. I will not try to tell you of all of them. There was the truth of virginity and the truth of passion, the truth of wealth and of poverty, of thrift and of profligacy, of carefulness and abandon. Hundreds and hundreds were the truths and they were all beautiful.

> And then the people came along. Each as he appeared snatched up one of the truths and some who were quite strong snatched up a dozen of them.
>
> It was the truths that made the people grotesques. The old man had quite an elaborate theory concerning the matter. It was his notion that the moment one of the people took one of the truths to himself, called it his truth, and tried to live his life by it, he became a grotesque and the truth he embraced became a *falsehood.*（イタリック体は筆者）（Anderson 3-4）

冒頭の文言は旧約聖書の「創世記」冒頭を思い起こさせる。要約すると、世界が若かった頃は真実などというものはなかったが、人が真実を作り出し、その真実は多くの曖昧な思想の寄せ集めだった。世界中に様々な真実があり、それらは全て美しかった。しかし人々がやって来て真実の一つをつかみあげ、力の強い一部のものが幾つもの真実をつかみあげた。その人々をグロテスクにしたのがその真実だった。真実を取り上げてそれを真実と呼び、それに基づいて生きようとするとグロテスクになり、真実も虚偽になる、というのが老作家の考えである。作者は人を意味する"man"と"the people"を使い分けている。この場合の"man"は人間が高度な文明や文化を持つ以前のまだ無垢で自然な人間を想定していると思われる。"Hands"のWing Biddlebaumが夢想する正にあるがままの「真実」が残る全てが美しい"a kind of pastoral golden age"であろう（Anderson 8）。Clarence Lindsayが"［truths］are human made, composed of something that apparently existed before man （attributing the truths to "man…himself" indicates that the thoughts from which the truths are made may have had an other-than-human origin）,…."と述べているが、「真実」は人が作り出したものだが、この作品の場合「思想」 は人間が出現する前から存在した神による崇高なものを想定しているのかも知れない（Lindsay xiv）。その後「人々がやって来る」という箇

所の"people"には定冠詞が付いているが、この場合の"the people"は豊富な知識と科学技術で武装し、自然を変える能力を持った特定の文明人を想定していると思われる。それまで曖昧な形で存在した「思想」で構成された「真実」をそれらの人々がつかみあげて生きる上での基盤にした途端にそれらは虚偽になってしまう。

　前に述べたように、老作家は「笑いを誘う」もの、「美しいと言ってもいいほど」のもの、また「見る影のない女性」をグロテスクだと考えているが、もしこれを *Winesburg, Ohio* に登場する人物たちに当てはめるとすれば、この基準からはみ出してしまう人たちがいるはずである。例えば「笑いを誘う」ものと言えば"The Strength of God"のCurtis Hartmanや"Hands"のWing Biddlebaumがこれに相当するであろうし、「美しいと言ってもいいほど」のものであれば"The Teacher"のKate Swift"、「見る影のない女性」とはGeorge Willardの母親Elizabeth Willardがそれに相当するだろうか。いずれにせよGeorge Willardのようにこの基準に該当しない登場人物がいる。老作家の「グロテスク」の定義は決して厳密ではないし、「グロテスク」、「真実」、「思想」と人間との関係もナレーターが言うほど込み入った説明ではない。従って"The Book of the Grotesque"を *Winesburg, Ohio* 全体を統一するものと考えて信頼を置き、Whiteが述べているように、これに基づいて各々の作品を解釈するのは無理がある。重要なのは「笑いを誘う」もの、「美しいと言ってもいいほど」のもの、「見る影のない女性」などに愛着を感じる"The Book of the Grotesque"の老作家が醸し出すほのぼのとした雰囲気及び孤独の中でグロテスクな人々の行列を夢想するというモチーフが、*Winesburg, Ohio* 全体の基調になっていることである。

Ⅱ
"Hands": AndersonはWing Biddlebaumを同性愛者として描いたのか

当時イェール大学の教授を務めていたNorman Holmes Pearsonに宛てた手紙の中で、Andersonはこう述べている。

> You spoke of the story "Hands" in *Winesburg*, and it just happens that the particular story was the first one I ever wrote that did grow into form. I remember well the thing happening. I had been struggling with it and with other stories, and at last one rainy night – I was living in a little Chicago rooming house – it came clear.
>
> I remember the feeling of exaltation, of happiness, of walking up and down the room with tears flowing into light.
>
> I was a kind of coming out of darkness into light. （*Letters* 387）

この手紙の文言からも察せられるとおり、"Hands"を書いていたときのAndersonは充実感に満ち溢れていたことが分かる。彼自身が感じていたように、この作品は*Winesburg, Ohio*の中でも構成、人物造形いずれの点においても、"The Untold Lie"と並んで、最も優れた短編である。*Winesburg, Ohio*には"The Strength of God"と"The Teacher"のように相互作用によって効果を上げているものもあるが、序文"The Book of the Grotesque"と"Hands"もその一例である。"The Book of the Grotesque"の「笑いを誘う」もの及び「美しいと言ってもいいほど」のものと老作家が定義する「グロテスク」なものと、ほのぼのとした雰囲気は序文に続く最初の短編として相応しい。"Hands"も"The Book of the Grotesque"の老作家同様、「一風変わった人物」のストーリーである。峡谷が尽きるあたりの小さな木造家屋にWing

Biddlebaumが独りで暮らしていた。"Wing Biddlebaum, forever frightened and beset by a ghostly band of doubts, did not think of himself as in any way a part of the life of the town where he had lived for twenty years."とある通り、彼は心に何らかの疑念を抱え、町の人々との交流はない（Anderson 5-6）。ただ*Winesburg Eagle*社で新聞記者をしているGeorge Willardに対してだけは心を開いている。籠に入れられた鳥の翼のように手が素早く動くので"Wing"という渾名が付けられたが、彼は人の目に触れることを恐れて常に手をポケットに入れて隠している。彼は本名をAdolph Myersといい、Winesburgに来る以前はPennsylvania州のとある町の教師だった。人当たりが穏やかで、他人の目からは人の良い気弱な人と映ってしまうような指導力しかなかったので、彼は他人からはほとんど理解されなかった。彼は男子生徒を連れて、学校の入り口の階段に腰を下ろして、暗くなるまで夢見心地で話し込んだ。しかし彼の「手」がもとでとんでもない事件が起きてしまう。話している最中に彼の手は男の子の肩を撫でたり、縺れた髪を弄んだりしてしまった。彼にとってこの行為は生徒たちにある種の夢を吹き込みたい熱意の表れだった。ある日生徒の一人が親に先生が両手で自分を抱いたこと、自分の髪を触っていることを伝えてしまう。親たちは怒り狂って彼に殴りかかり、おびえた彼は町から這々の体で逃げていった。

ここでWing BiddlebaumとGeorge Willardの関係に焦点を当て、彼の人となりを検討してみたい。George Willardと会っているときのWing Biddlebaumはまるで人が変わったかのように怯えた態度が影を潜め、通りを大声で話しながら闊歩し、普段は低い声が高くなり、猫背がまっすぐ伸びる。彼が心をGeorge Willardに対して開くのは、教師をしていたときの生徒と同じように、彼の話を聞いてくれるからだ。彼はGeorge Willardと話をする時、決まって彼の身体に触れる。

Wing Biddlbaum became wholly inspired. For once he forgot the hands. *Slowly they stole forth and lay upon George Willard's shoulders.* Something new and bold came into the voice that talked.

Pausing in his speech, Wing Biddlebaum looked long and earnestly at George Willard. *His eyes glowed. Again he raised the hands to caress the boy* and then a look of horror swept over his face.

With a convulsive movement of his body Wing Biddlebaum sprang to his feet and thrust his hands deep into his trousers pockets. Tears came to his eyes. "I must be getting along home. I can talk no more with you," he said nervously.（Anderson 8-9）

Although［Wing Biddlebaum］*he still hungered for the presence of the boy*, who was the medium through which he expressed his love of man, the hunger became again a part of his loneliness and his waiting.（イタリック体は筆者）（Anderson 12）

恐らくAndersonはWing Biddlebaumのホモセクシャルの性的指向を意図して書いたと思われる。例えばAndersonは"caress"という表現を用いているが、同性に対してこの行為は通常はあり得ない。しかもWing BiddlebaumがGeorge Willardの存在を"hunger"するというのは、友人に期待する限度を超えている。George Willardに触れる時、彼は心の奥底に仕舞い込んだ以前の事件を思い出し、急いで手をポケットに入れる。Wing Biddlebaumが手をせわしなく動かしたりWinesburgの町に未だに適応できないのは、敵視や軽蔑の対象となった以前の経験を抑圧しているからである。

Andersonは*Memoirs*の中でこの作品を一気に書き上げたと述べているが、Phillipsによる一次資料の検証は作者が特にホモセクシャルを窺わせる箇所

に入念な修正を施していることを示している（*Memoirs* 237-238, 352）。PhillipsはAndersonが特にどういう点に留意して修正を行ったかについて、次のように述べている。

> …the substitutions and additions which he made to the story show more clearly his attempts to give an accurate rendering of the fanciful figure of Wing Biddlebaum and his hands. Anderson was first of all aware that he would have to avoid any details about Wing's case that would disgust the "normal" reader if he were to treat the homosexually inclined character with sympathy. He must avoid the suggestion that Biddlebaum's attraction to George Willard is wholly erotic in nature. （Phillips 76）

さらに具体的な修正の例を挙げると、"With George Willard...he had formed something like a friendship"の"something like"は後から加えられたものであり、また"he still hungered for the boy"は"he still hungered for the presence of the boy"と書き換えられ、"［Biddlebaum's hands］stole to George Willard's shoulders"は"［Biddlebaum's hands］stole forth and lay upon George Willard's shoulders"と修正されている （Phillips 76）。

正統派のキリスト教は同性愛を性倒錯症として常に罪深い悪徳・罪悪とみなし、国レベルでは同性愛を法的規制の対象にしているところもある（イギリスでは1895年に作家のOscar Wildeが同性愛にまつわる裁判でスキャンダルになった例がある）。それにより同性愛者は人々の嫌悪や軽蔑の対象になってきた。D. J. Westは「アラブやアジアの多くの国々では、同性愛行為はごくありふれたものであり、たいていの人から気楽な無関心で見過ごされるため、大きな問題が生じることは殆どない。しかし世界全体がアメリカの影響を蒙るようになった現在、事情は急速に変わりつつある。」

と述べている（ウェスト 105)。アメリカには猥褻なものや非道徳的なものを掲載した出版物を検閲する法律が植民地時代から作られていた（最も初期の条例は1711年にマサチューセッツ湾植民地で制定された"An Act against Intemperance, Immorality, and Profaneness, and for Reformation of Manners"である)。その伝統は19世紀のAnthony Comstockに代表される、猥褻な出版物を狂信的に取り締まる、亀井俊介の言葉を借りれば、「ピューリタンの末裔」に受け継がれていくのである。[3] "The Strength of God"のKate Swiftのように、女性が喫煙をしているだけでも特に保守的な田舎町では白眼視された時代であり、アメリカ社会の同性愛者を見る目が今以上に厳しかったことは想像に難くない（当然現在でも数多くの保守的な人々は同性愛に対して不寛容を貫いているが)。

Andersonがホモセクシャルを感じさせる露骨な描写を少しでも和らげたかったのは、恐らく作品の真の意図をその描写によって曲解されるのを避けるためだったと思われる。Andersonは作品の意図について"It was about a poor little man beaten, pounded, frightened by the world in which he lived into something oddly beautiful."と述べているが、彼が作品で目指したものはこの引用の"something oddly beautiful"に集約されている（*Memoirs* 352)。Andersonは*Memoirs*の中で、同じ同性愛者の仲間に"Hands"を読んで聴かせているという男性から話しかけられるエピソードを紹介している。その男性は同性との関係について次のようにAndersonに話す。

> "We fairies," he said to me, "have a great fear of growing old. We are always after young and to us beautiful men. I myself often read your story 'Hands' aloud to young men among us. We are as we are. It is an effort to bring a little nobility into our relationship.
>
> "I do not mean to suggest anything about the school master of your story. I

am only trying to tell you that real love does sometimes enter into our relationship. （*Memoirs* 473）

またその直前でAndersonは5000エーカーもある大農園を共同経営する同性愛と思われる二人の女性のエピソードを紹介している。

It was such a pair of women as you sometimes see, going through life together. There is between them such love as might be between a man and woman but, being with them, knowing them, you sense that it is not a Lesbian love. It is often a love based on natural loneliness, the desire for at least one close companion in life. （*Memoirs* 473）

当時のアメリカの知識人たちにもてはやされた精神分析は文学批評にまで影響が及び、"Hands"もその観点から読まれたことをAndersonが嘆いていた事実も紹介されているが、Andersonが*Memoirs*の中で紹介しているエピソードはそのまま"Hands"の意図を明確に表しているのではないだろうか（*Memoirs* 473）。"Hands"のWing Biddlebaumも同性愛の傾向はあるにせよ、希求しているのは"real love"であり、George Willardに寄せる思いも"one close companion"を求める純粋な愛情である。それを求める行為が多くの人とは違った形で表出することと"a ghostly band of doubts"を心の中に押し込めていることで、外見と仕種がグロテスクになってしまうだけなのである（Anderson 5）。"Hands"に"Sympathetically set forth it would tap many strange, beautiful qualities in obscure men."という文が挿入されているが、Andersonがこの作品を書いた目的こそこの名もない人の様々な奇妙にして美しい特質を汲み取ることだったのである（Anderson 7）。*Winesburg, Ohio*が1919年に出版された当時、この作品が物議をかもしたことは有名な話である。特

に"Hands"は男色めいた話が展開されることから、保守的な一般読者の嫌悪感を引き起こした。しかし"Hands"は現代の読者にも様々な問題を提起する。ある意味では読者を試す要素を持っているのではないか。同性愛は生殖を伴わない性的逸脱行為と見なされてきたので、この作品のWing Biddlebaumのように、同性愛者は宗教上・倫理上の差別を受けてきた。しかし現代では同性愛と遺伝子との関係を指摘する研究者もいる時代である。Andersonが*Memoirs*などで指摘しているように、自分とは諸々の性質を異にする相手を現実に存在するものとして受け容れることによって、常人とは違った性質を持つ異常なものグロテスクなものという偏見を捨てて美点を評価できるようになるのではないか。"Hands"はそのような読者の姿勢の変化を迫る作品ではないだろうか。

Ⅲ
結　び

*Winesburg, Ohio*に収録された短編の一部はそれぞれ独立した作品として、本の出版以前の1916年から1917年の間に幾つかの雑誌に掲載された。"The Book of the Grotesque"は1916年２月に、"Hands"は同年３月にいずれも文芸雑誌*Masses*に掲載されている。"The Book of the Grotesque"の執筆時期はPhillipsの論文によると1915年11月頃で、"Hands"も同時期に書かれている（Phillips 64）。この二編は最初期のもので、*Winesburg, Ohio*の他の短編よりも掲載時期が早い。Phillipsによると作品の出版元のBen Huebschが"The Book of the Grotesque"の原稿を見せられ、彼が*Winesburg, Ohio*というタイトルにすることを提案し、Andersonもそれを受け容れたという（Phillips 83-84）。しかしSister Martha CurryはAndersonと James Joyceの作品（特に*Dubliners*）の関係に関する論考の中で、Phillipsの説を直接的では

ないにせよ否定する見解を述べている。彼女はAndersonが友人であるWaldo Frankと交換した手紙を検証し、彼がそれまで書きためてきた短編を"Winesburg tales"と言及していたことや、作品全体を"*Winesburg*"と呼んでいたことを紹介している（Curry 239）。"The Book of the Grotesque"のグロテスクの定義を全ての短編の登場人物に当てはめるわけにはいかないし、彼女の結論が一次資料を根拠にしていることから、Curryの指摘している事実関係の方を重視するのが妥当と思われる。

"The Book of the Grotesque"というコンセプトは1915年に出版されたEdgar Lee Mastersの代表作*Spoon River Anthology*の影響を受けている。AndersonがChicagoで執筆していた当時近くに住んでいたMax Waldが彼にその本を貸し、次の朝に返却する時に遅くまで起きてその本に夢中になったと話したという（Sutton 430）。翌朝会ったAndersonは内容にとても驚いたとWaldに話している。その詩集は墓石に刻まれた碑文の形式をとり、詩一つ一つに故人の名前と生前の経歴や思いが綴られており、Illinois州Petersburgの共同体に住む住民たちの人生を集約している。Andersonが仮にこの作品の長所を*Winesburg, Ohio*に取り入れたのだとすれば、それは恐らく一つの詩に一人の人生を盛り込む技法だと思われる。*Windy McPherson's Son*と*Marching Men*という*Winesburg, Ohio*以前に書かれた彼の作品には手法にしてもテーマにしても人を驚かすような斬新さは全く見られない。それらはむしろ伝統的なプロット中心の小説で、場面をつなぎ合わせて自然な筋の運びを作り出す構成力が欠如しているために話の運び方も粗野で不統一になり、登場人物の不自然で唐突な行動なども散見される。*Winesburg, Ohio*ではある一瞬を切り取ってそれを短編形式に作り上げる彼の能力とMastersから得た着想がうまい具合に融合した。時流に乗った前二作とは打って変わって、"commonplace people"をAndersonが作品に登場させたことがアメリカ文学への彼の最大の貢献だとDavid D. Andersonが断定

しているとおり、彼のこの形式とグロテスクというテーマは彼が作家になってから掘り当てた最高の鉱脈だったのかも知れない（David D. Anderson 56）。

注

1　Andersonは回想録の中でNew Englandの岩の多い寒々しい情景と19世紀に活躍したその地方の文人たちの名前を挙げた後で、"Puritans, eh? Well, I dare say they were no more pure than we of the middle west."と述べている（*Memoirs* 341）。また回想録には"...all the time our minds were being dominated by English puritan thought, the dreadful hypocrisy of English puritan thought."という記述もある（*Memoirs* 409）。

2　Anderson自身にも「出版しない」という思いがあったらしい。彼は自伝の中で"When later I began to write I for a time told myself I would never publish and I remember that I went about thinking of myself as a kind of heroic figure, a silent man creeping into little rooms, writing marvelous tales poems, novels—that would never be published."と述べている（*A Story Teller's Story* 72）

3　亀井はAnthony Comstockが行った一連の猥褻物取り締まりを記述し、「ピューリタン的」アメリカが作られていった過程を分かり易く説明している。亀井『ピューリタンの末裔たち』pp. 73-87参照。

引用文献

Anderson, David D. "Sherwood Anderson's Grotesques and Modern American Fiction." *Midwestern Miscellany* XII （1984）, pp. 53-65.

Anderson, Sherwood. *A Story Teller's Story: A Critical Text.* Ed. Ray Lewis White. Cleveland: The Press of Case Western Reserve University, 1968.

----------. *Letters of Sherwood Anderson.* Eds. Howard Mumford Jones and Walter B. Rideout. New York: Kraus Reprint Co., 1969.

----------. *Sherwood Anderson's Memoirs: A Critical Edition.* Ed. Ray Lewis White. Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1969.

----------. *Winesburg, Ohio.* Ed. Ray Lewis White. Athens: Ohio University Press, 1997.

Cowley, Malcolm. "Introduction." *Winesburg, Ohio.* The Viking Press, 1958.

Curry, Sister Martha. "Sherwood Anderson and James Joyce." *American Literature* 52（1980）, pp. 236-249.

Hawthorne, Nathaniel. "My Kinsman, Major Molineux." *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne* Volume XI. Ohio State University Press, 1974.

Lindsay, Clarence. *Such a Rare Thing: The Art of Sherwood Anderson's Winesburg, Ohio.* Kent, Ohio: The Kent State University Press, 2009.

Papinchak, Robert Allen. *Sherwood Anderson: A Study of the Short Fiction.* Twayne Publishers, 1992.

Phillips, William L. "How Sherwood Anderson Wrote *Winesburg, Ohio." The Achievement of Sherwood Anderson: Essays in Criticism.* Ed. Ray Lewis White. Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1966.

Poe, Edgar Allan. "The Masque of the Red Death." *The Complete Works of Edgar Allan Poe* Volume IV. New York: AMS Press Inc., 1965.

Sutton, William A. *The Road to Winesburg: A Mosaic of the Imaginative Life of Sherwood Anderson.* Metuchen, N.J.: The Scarecrow Press, Inc., 1972.

White, Ray Lewis. *Winesburg, Ohio: An Exploration.* Twayne Publishers, 1990.

ウェスト, D. J. 『同性愛』村上仁・高橋孝子訳.　人文書院, 1977.

カイザー, ヴォルフガング『グロテスクなもの：その絵画と文学における表現』竹内豊治訳. 法政大学出版局, 1968.

亀井俊介『ピューリタンの末裔たち：アメリカ文化と性』研究社, 1987.

八木敏雄 「アメリカン・ゴシックの系譜（1）」 英語青年1986年4月号. pp. 28-30.